

「サラの parti」

あるいは追悼の余白に読むことができるもの

(サラ・コフマンを読むデリダ) ^{*1)}

オリビエ・アムール＝マヤール^{*2)} 著

岩切 正一郎 訳

ジャック・デリダには死と負債に関する多くの著述がある。特に、追悼文、すなわち、友人、近親者、知遇を得た哲学界の著名人の逝去に際して執筆を依頼された折々のテキストにおいてそれが見られる。2003年に出版された『そのたびごとにただ一つ、世界の終焉』¹⁾は、デリダが終生展開してきた死と負債の様々な交差を恐らく最も見事に跡づける著作である。同書に収められているサラ・コフマンを追悼するテキストは注目に値する、というのも、他のテキスト同様、ここでも、デリダに親しい死と負債のテーマが結び合わさっているからであるが、しかしそれだけではな

アラビア数のみの註番号は原註。訳註には*を付した。原註内の訳者による補足は〔 〕に入れる。なお、本文および註における引用は、既訳を参考にしつつ、われわれの訳を用いる。

*1) « parti »を多義的に使用しているのであえてフランス語のままにしておく。普通には「サラの味方」、あるいは邦訳を参照すれば「サラの態度決定」。本稿註*3)を見よ。なお、本文のフランス語表現« ce qui se donne à lire »は「読むようにと与えられているもの」とも訳せる。本稿p. 134:「デリダという名は〔…〕タイトルとして読むように与えられている」を参照。

*2) 論文著者名は、本人が日本の公的機関に登録してあるカタカナ表記を使用した。

1) Jacques Derrida, *Chaque fois unique la fin du monde* (Présenté par Pascale-Anne Brault et Michel Nass), Galilée, « La Philosophie en effet », 2003. [邦訳:『そのたびごとにただ一つ、世界の終焉』I (土田・岩野・國分訳)、II (土田・岩野・藤本・國分訳) 岩波書店、2006年。「サラ・コフマン」追悼文はIIに「…………」(3点リーダー3個。9点)のタイトルで所収。Galilée版は« …… »(ellipsis 2個分。6点)のタイトルとなっている。]

く、このノエマ的結節点に、〈性的差異〉を通じて代補が加えられているからでもある。性的差異は、彼の全著作を横断する別の問題系である。ところで、サラ・コフマンを偲んで書かれたこのテキストは、初め『カイエ・デュ・グリフ』誌に掲載されたが、この時にはタイトルがなかった。この追悼文を読もうとすると、これは重要さとしては一番上に来る要素だ^{*3)}。さらに、このテキストは、デリダが女性哲学者のために書いた希少な賛辞のひとつである、ということも言うておかななくてはならない。

サラ・コフマン追悼の、タイトルのないテキストは、あふれ出る [déborde] ……文字通り縁を脱してあふれる [dé-borde ses bords]。こうして、デリダは、サラ・コフマンおよび彼女の書いたテキストを参照するだけではなく、彼自身の著作との全関係を織りあげてもいるのである。従って我々は、コフマンに関するテキストの余白のなかにデリダの文章を追ってゆかなくてはならない、そうして初めて、この無頭のテキストについて何事かを言うことができるだろう。無頭の、あるいは、より正確には、無題の。もっとも、デリダは、いつでも可能な様々なタイトルを指し示すために、抗議としてあえてそうしたのだから、無題と言ったら彼の意に反することになるのではあるけれども。

我々がまず見ておきたいのは、デリダはまさにこうして抗議を演じることにおいて、コフマンに関するテキストにタイトルを付ける可能性を廃棄している、ということだ。次に、我々は、「タイトル」という語のラテン語源が、デリダが自分の声を貸し与えている様々な役の演技のシーンにおいて、いかなる点で要の〔capital〕^{かなめ}役目を果たしているのかを明らかにしよう。それというのも、テキストの開始早々（テキストの演出が開始されるとすぐに）、問題となるのは署名、副＝署、贈与、反＝贈与〔返礼〕、相

*3) 「重要さとしては一番上に来る」(capital)：形容詞« capital »は「重要」という意味だが、語源のラテン語 *caput* (頭) とタイトルがページの頭に置かれる、ということを掛けている。頭とタイトルの関係性は、この後、「無頭あるいは無題」といった表現を通じて言及される。

Jacques Derrida

D'abord, je ne savais pas, et toujours je ne sais pas quel titre donner à ces mots.

Qu'est-ce que le don d'un titre ?

J'ai même été effleuré par le soupçon que le don d'un titre était un peu indécent : sélection violente d'une perspective, cadrage interprétatif abusif ou réappropriation narcissique, une signature voyante là où c'est de Sarah Kofman, de Sarah Kofman toute seule, de Sarah Kofman elle-même, *là-bas*, au-delà d'ici, bien au-delà de moi ou de nous ici maintenant, de Sarah Kofman qu'il convient de parler et que j'entends parler.

Sarah Kofman

serait alors le meilleur titre si je n'avais encore peur de ne pas être capable de m'y mesurer.

Finalement, la question restant celle du don et de ce qu'on fait à donner un titre, il m'a semblé plus juste de parler justement du don chez Sarah Kofman, de ses dons : ceux qu'elle nous a faits, ceux qu'elle nous a laissés, les dons aussi qu'elle a peut-être reçus.

Les Cahiers du Grif 131

互的抗議だからだ。デリダはその物語を我々に語ろうとしているのである。最後に、デリダの主な関心は彼が「言語における遂行的なもの」²⁾と名付けるものにあることを踏まえて、我々はテキスト間のこうした送り返し、響き合い、副署の戯れが、いかなる点で、〈性的差異〉あるいは〈性的な種々の差異〉〔Différence(s) Sexuelle(s)〕の(特定の帰属なしの)ある種の不安の争点を語りあるいは展開しているのかを見ることにしよう。というのも、D.S. (と、〔Différence(s) Sexuelle(s)〕名詞の性や数は記さずにこれ以降呼ぶことにする³⁾) が到来し、通過し、結合し、ほぐれるのは、常に多義性のなかにおいてであるから。

タイトルの選択 (parti)

コフマンについてのデリダによる無題のテキスト⁴⁾のなかでは、一切がこの「無題」の周りを巡っている。空白のタイトル、タイトルの欠如、言ってしまうとタイトルの欠落は、「タイトルを付けることの否定」〔non

2) ジャック・デリダの言葉、in Mireille Calle-Gruber, « OÙ la philosophie et la poétique, indissociables, font événement d'écriture. Entretien avec Jacques Derrida », *Cahiers de l'École des Sciences philosophiques et religieuses* n° 20 « Le Spectaculaire », Bruxelles, 1996, repris in *Littérature* 2006/2 (n° 142), « La Différence Sexuelle en tous genres », juin 2006, pp. 16-29.

3) « D.S. »の略号はエレヌ・シクスー (Hélène Cixous) によって使用された (« Contes de la Différence Sexuelle », dans l'ouvrage collectif *Lectures de la Différence Sexuelle* (Mara Negron Éd.), Antoinette Fouque-Des Femmes, pp. 31-68)。この論集にはデリダも参加している (後で彼のテキストも参照される)。違った面のもとにはあるが、この思考の系譜のなかに、私がここで使う略号は書き込まれているということになる。
J.D./D.S./S.K. という略号の戯れを通じて、ジャック・デリダ Jacques Derrida (J.D.) とサラ・コフマン Sarah Kofman (S.K.) との間に、D.S. が結合/縫合/切断を作り出していたということに彼自身気づいていたかどうかを知ることは不可能である。デリダは言語において賭けられている争点、そして文法が許容する言語の戯れにとりわけ注意深かったのだから、そのことに気づいていなかったとすれば驚きであろう。しかし、明確にそれを知ることとはできない。

4) Jacques Derrida, « », *Les Cahiers du Grif* n°3 « Sarah Kofman », Paris, Descartes & Cie, printemps 1997, pp. 131-165. この号は国際哲学コレージュによって1996年11月16日開催された追悼の一日の記念論文集となっている。

titre] なのではない。というのも、空白はタイトルのスペース、場所を示しているのであり、従ってタイトルの代わりをしているのだからだ。タイトルの欠落は、常に生成状態にあり、常に出現可能な状態にあるタイトルを担った影として与えられている。とはいえ、この欠落は、明白に言表されてはいないもののテキスト全体にそれ〔欠落〕が働きかけている打音について問うよう我々に要請する。タイトルの否定とタイトルの欠如との区別は重要だ。実際、デリダのテキストにおけるタイトルの不在は、何よりも、亡くなった友人への賛辞であることを望むテキストを名付けないこと、テキストにアイデンティティーを保証しないことに発している。このテキストおよび友人は、こうして言わば禁書に指定され責められることがないままとなる。その後に続く内容を示し、それによって固定し、一挙に言挙げするようなタイトルによって指差されてはいないもの。なぜなら、テキストの導入部でデリダはこう言っているからだ。「語るべきは、そして私が語ろうと思うのは、サラ・コフマンについて、唯一サラ・コフマンについてだけ、サラ・コフマン自身について、彼方の、此処を越えたところの、今ここにいる私あるいは私たちを越えたところの彼女、サラ・コフマンについてなのだ」⁵⁾。とはいえ、デリダのエクリチュールの運動は、それが遂行性を帯びている時間のなかで、その主張そのものに問い直しを迫る。

そのことに気づくためには、タイトルの抜け道をたどる必要がある。テキストの敷居を引き受け、タイトル概念そのものを分析するのだ。ジュネットは『種々の敷居』〔邦訳：『スイユ：テキストから書物へ』〕のなかでこう述べている。「タイトルは、知られているように、書物の“名前”だ。そのようなものとして、タイトルは、可能な限り正確に、また過度の曖昧さなしに、書物を名付ける、つまり、指示する務めを果たす […]」⁶⁾。と

5) *Ibid.*, p. 131. 強調はデリダ。

6) Gérard Genette, *Seuils*, Seuil, « Poétique », 1987, rééd. « Points-Essais », 2002, p. 83. 引用符はジュネット。〔邦訳：『スイユ：テキストから書物へ』、和泉涼

ころで、タイトルをこのような形で、それほどの「曖昧さなし」に、ひとつの意味へ割り当てることが、この〔タイトルという〕語のトポロジックな定義は自明であるという考えを後押ししようとしているとするなら、それとは逆に、デリダのテキストは、事情はそうではないことを明らかにしている。事実、タイトルを与えずに、そしてその存在の見ていて見えていない痕跡を出現させつつ、白い空虚を通じて、タイトルのトポロジーと機能を問うことは、問いが含むある種の偶発性をずらすに留まらず、タイトルに関する問題が存在するという事実そのものを強調することにもなるのである。そしてこのときから直ちに、そこへ執着しなくてはならないということ。

この展望のもとで、しかしながら覚えておかななくてはならないのは、たとえそれが今我々に関係しているテキストを跨ぎ越してしまうことを含意するとしても——最終的にはそこへまた戻るにしても——、タイトルの欠如は、先行するデリダの二著作へ目配せをしているということだ。一方では、編集者によって権威的に掲げられたタイトルのもとに出版されることになるテキスト、すなわち、『散種』に再録される「二重の会」^{セアンス}を喚起しなくてはならない。他方では、正確にはタイトルの不在を目立つ形で掲げているわけではないが、哲学者のエバーハルト・グリュューバーが論文「“ハイデガー的”タイトル」⁷⁾において「半ばのタイトル」と特徴付けたもの。つまり、初め1981年に発表され、次いで1986年に、モーリス・ブランショ論である『境域』に再録されたデリダのテキスト「明確にすべきタイトル」〔タイトル未定〕である。

コフマンに関するテキストのタイトルとなっているタイトル欠如と、ブ

一訳、水声社、2001年]

7) Eberhard Gruber, « Le Titre “heideggerien” ou de la fonction titulaire en régime de (dé)construction du savoir », in *Paratextes – Études aux bords du texte* (Mireille Calle-Gruber & Elisabeth Zawisza Éd.), L’Harmattan, « Trait d’union », 2000, p. 128.

ランショ作『白日の狂気』の特殊なパラグラフ研究の開口部となる「半ばのタイトル」との関連は偶然ではない、と私は仮定する。とりわけ、「パラテキスト」的要素があるためにそう仮定する。デリダは、女性哲学者コフマンへの追悼のなかで、彼女の1983出版の著書『いかにして抜け出すか?』の読解に大きなスペースを割いているのだが、この『いかにして抜け出すか?』自体が、一方では、「明確にすべきタイトル」のなかで喚起されているブランショのテキスト『白日の狂気』への参照を行い、また『白日の狂気』からの引用が、アポリアの問題に関するコフマンの書の冒頭の銘となっているのだし、他方では、『いかにして抜け出すか?』は、ブランショの同テキストを巡るデリダの別のテキスト「ジャンルの掟」への参照を行っているのだからである。このテキストは初め1979年に出版され、「明確にすべきタイトル」と同じ巻に再録された。ところで、「明確にすべきタイトル」はタイトルの問題に多くのスペースを割いているが、そのなかでデリダは、ジュネットに沿いながら、しかし立場を異にして（それについては後述する）、以下のように述べている。

私は命題の形で次の事を言いたいのだ、ということにしてみよう。タイトルは常に名の構造を持ち、固有名詞の効果を結果としてもたらし、その限りにおいて／その^{タイトル}資格において [à ce titre]、それは、じつに奇妙なやり方で、^{ラング}言語からも^{ディスクール}言説からも異邦のものとして留まる。タイトルは言語や言説に異常な参照機能と暴力を導入する。法と掟を基礎づける非合法性を導入するのだ。⁸⁾

後で述べるが、しかし今確認しておきたいのは、ほとんど条件法的な「私は……したいのだ、ということにしてみよう」という言い方が、パラ

8) J. Derrida, « Titre à préciser », in *Parages*, Galilée, « La Philosophie en Effet », 1986, éd. revue et augmentée, 2003, p. 210. [邦訳:「タイトル未定」、『境域』、若森栄樹訳、書肆心水、2010年]

グラフに宙吊り状態をもたらしているということだ。デリダが聞き手（読者）に対して意味しているのは以下のことである。自分が言っていることは真実であると自分は主張する、しかし、それが必要だと分かったときには、自分の主張から身を引き、主張を撤回できるという限りで。そうデリダは意味しているのである。「ということにしてみよう」とは、認めはするが、しかし、認可を留保しながらだ、ということに他ならない。譲歩を表明する時間のなかに、先取りして、あり得る退却の隔たりが書き込まれている。タイトルについての、デリダによるこの「命題」のなかに、少なくとも一部は、コフマンについてのテキストのタイトルとしてのタイトル欠如の説明がある。

実際、仮にタイトルが「固有名詞の効果の結果としてもたらし」、従って、「^{ラング}言語からも^{ディスクール}言説からも異邦のものとして留まる」のだとすれば、この世を去った友人についてのテキストへ、どのようにタイトルを付けるのか、つまり、「名付ける」のか、決まった場所に居住するように強制するのか、従って「暴力」をふるうのか？ タイトルを付けるということは、デリダによれば、発話遂行行為を行うことに他ならない。その行為は、タイトルが「指向対象への参照機能」を持つことを皮切りに、「暴力」をふるい〔faire violence〕、と同時に自分にも暴力をふるう／自らを律する〔se faire violence〕ことに他ならない。先を続ける前に注意しておきたいことがある。デリダは、この暴力が誰に向かって、あるいは、何に向かって作動しているのかという問いを宙吊りにしている。従って我々は、暴力は全方位的な暴力だと想定できる。それがS.K.であろうと聞き手（つまり、我々も）であろうと、相手へ向けられているのである。しかしまた、発話者へ向けられてもいる。もしタイトルがあったなら、少なくとも本論の枠組みでは、それは第二の暴力を引き起こすことになっただろう、亡くなった友人へ向かって、暴力的にこの世を去った女性への記憶へ向かっ

て、暴力を遂行することになっただろう⁹⁾。

とはいえ、タイトルとのこの関係はデリダの取る立場において賭けられている／演じられていることの一部を示しているに過ぎない。コフマンについてのテキストにおける彼の立場の別の面を解説するには、「明確にすべきタイトル」の読解を追わなくてはならない。

タイトルには、もちろん、スペースを空けることが必要だ。しかし、一定幅の縁取りでラインを止めるというトポロジックな規則の厳密な規定も必要なのだ。タイトルは作品の縁にしか生起しない。タイトルが、自分の名付けるコーパスに取り込まれるがままになっていたら、単純素朴にその一部になっていたら、そしてまるで作品内の要素のひとつであるかのように、パーツのひとつであるかようになっていたら、タイトルは自分の役目を演じることを止めることになり、タイトルの価値を放棄することになる。だがまた、タイトルがコーパスから完全に外部にあり、掟、法、規則によって予想される距離よりもそこから大きく遠ざかっているなら、それももはやタイトルではないであろう。¹⁰⁾

ところで、タイトル不在の配置において、ひとつの強烈な一撃がエクリ

9) サラ・コフマンは、自伝的テキストである『オルドネル通り、ラバ通り』(*Rue Ordener, rue Labat* (Galilée). 邦訳: 庄田常勝訳、未知谷、1995年) 出版直後の1994年10月15日に自殺した。その日は彼女が専門としていたニーチェの生誕150年の日に当たっていた。ジル・ドゥルーズを指導教授として1969年に学位を取得した博士論文は1972年に出版された (*Nietzsche et la métaphore*, Payot, « Bibliothèque scientifique »)。同書は二度にわたって増補改訂され (1983、1985年)、ガリレー社の「論叢」叢書 [collection « Débats »] から同タイトルで出版された。

10) J. Derrida, « Titre à préciser », *op. cit.*, p. 211. 強調はデリダ。[邦訳の「空間化することなしにタイトルはない」(p. 329)におけるデリダの概念の「間隔化」は、ここでは「スペースを空けることなしにはタイトルはない」という印刷上の配置を指す]

チュールによって行われている。エクリチュールによるこのクーデター、それはまた、友情の一撃でもあるのだが（そこには、贈与の問題について、贈与の力について、贈与が何であるかについての曖昧さがすでにそっくり見て取られる）、我々はそれを分析しなければならない。デリダによる読解そのものによって組織された迂回路を通してそうするのだ。

コフマンへの追悼のやり方を通じて感じられることだが、デリダは、不在を越え、死を越えて、喪われた友との最後の対話を打ち立てようとしているのであろう（この〔推定の〕条件法は重要である）。二人の哲学者の間での、この不可能な対話が引き起こす転位は、テキストとそのタイトルとのジャンルのな〔*génériques*〕またトポロジックな転位であるが、同時に、おなじ所作で、性的ジェンダー〔*genres sexuels*〕の転位でもある。デリダとコフマンが織りなす諸テキストとの関係を打ち立て打音を奏でるテキストは、追悼のテキストの射程と同時に性的ジェンダーも揺るがせる。このようにしてデリダは気づいたのだろうか、タイトルなしで、彼のテキストは「ジャック・デリダ」というタイトルあるいは「サブ＝タイトル」へと名乗りを上げていた、と。彼がそのことを読み取っていなかったとしたら驚きであろう。

S.K. についてのテキストの冒頭〔*incipit*〕と「明確にすべきタイトル」から引用した文章とを付き合わせてみよう。デリダの主張するように「タイトルは作品の縁の上にしか生起しない」のだとすれば、そのとき、このテキストの身分〔*titre*〕として、タイトル〔*titre*〕として提出されるのは、「ジャック・デリダ」である。目次の印刷配置によって強化されるテキスト効果。というのも、タイトルの空白はそこでは「演じられて」もないし、「表象されて」もないからだ。「ジャック・デリダ」という名は、目次を上から下へ見ていくと、著者名ではなく、論文タイトルとして読むように与えられている。不在のタイトルの場所を示すスペースも、三点リーダーも、ほかのどんな約物もない——それがあつたら、否定されてはいるが目に見える痕跡があるということによって、結局は名付けること

Sarah Kofman

textes rassemblés par Françoise Collin et Françoise Proust

Impasses et passes, <i>Françoise Proust</i>	5
L'impossible diététique. Philosophie et récit, <i>Françoise Collin</i>	11
Cours, Sarah !, <i>Jean-Luc Nancy</i>	29
Le regard et la femme, <i>Monique Schneider</i>	39
Enfances de Sarah, <i>Jean Maurel</i>	55
Kofman lectrice de Rousseau : la tenue à distance, <i>M.-B.Tahon</i>	71
Comment philosophe une femme, <i>Françoise Duroux</i>	87
Renversements, <i>Joke J. Hermesen</i>	107
<i>Jacques Derrida</i>	131

Textes de Sarah Kofman

Sacrée nourriture	167
Tombeau pour un nom propre	169
« Ma vie » et la psychanalyse	171

Éléments biographiques

Bibliographie	176
---------------	-----

dessins de Sarah Kofman

『グリフ』サラ・コフマン追悼号の目次

に、新たに指定することになってしまうだろう。今や、「ジャック・デリダ」というタイトルのもとに、サラ・コフマンについての追悼のテキストが示されているのである。

追悼文にタイトルをつけないことで、J.D.は「ジャック・デリダ」が、代替不能のタイトルにたいする代替のタイトルの価値を持つことになる、と完全に知っていた。その舞台のなかで我々もまた演じることになるだ

ろう。このタイトルはタイトルの場所でタイトルの（かつ／あるいはサインの）代わりをし、J.D.とS.K.の間で、彼女の言葉と彼の言葉との間でD.S.を演じる、ということもJ.D.は知っていた。それに、追悼の最初の文章は（その振りをしているというのでなければ）みずから間違いを犯している。「これらの語に、どのようなタイトルを付ければ良いのか、私には分からなかったし、今も分からない」¹¹⁾。論理家のロジックでは、読者はこの文章を、その後に続く言葉への参照と解釈するだろう。だが逆に、こうも考えられるのだ、それは先立つ言葉に関係しているのだ、と。つまり、「ジャック・デリダ」に。ところで、冒頭〔*incipit*〕に続く部分で強調されるのは、S.K.論という枠組みのなかで、デリダ的エクリチュールによって遂行されるこの手品なのである。既に引用したパラグラフをもう一度取り上げてみる。

タイトルの付与とは何か？

タイトルの付与はいささか慎みに欠ける、という疑念がふとよぎりさえした。ひとつの視点を暴力的に選び出すこと、不当になされる解釈のフレーミング、もしくは、自己陶酔的な再所有化。目立つ署名があるにはある、だがそこで語られるべきは、そして私が語ろうと思うのは、サラ・コフマンについて、唯一サラ・コフマンについてだけ、サラ・コフマン自身について、彼方の、此処を越えたところの、今ここにいる私あるいは私たちを越えたところの彼女、サラ・コフマンについてなのだ。¹²⁾

このテキストのなかでとりわけ厄介な、贈与の概念に関する問題には、後で戻ることしよう。とはいえ、今ここで指摘しておくことがある、そ

11) J. Derrida, « », *op. cit.*, p. 131.

12) *Ibid.* デリダが強調している「彼方の」〔là-bas〕を除いて、強調は引用者。

れは、副署の戯れを通して作動を開始する交換を強調するためであるかの
ように、デリダがこう付け加えているということだ。「自分がそれに匹敵
できないのではないかという恐怖さえなければ、サラ・コフマン／という
のが最良のタイトルであろう」。

我々はふたつの要素に注目しなくてはならない。その後に続くテクス
トとの関係においてタイトルに割り当てられているスペースがはらんで
いるアボリアを、それぞれの視点に沿って強化することになる様々な対
立。一方では、「サラ・コフマン」というタイトルが、しかるべきタイト
ルが皆そうであるようにイタリック体になされ、タイトルの——発話内容と
してではなく——参照価値においては取り消されている、テキストの中心
に記名されているという原則そのものによって取り消されている、という
こと。実際、「明確にすべきタイトル」においてデリダはそれを強調して
いた。もう一度取り上げよう。「タイトルは作品の縁の上にしか生起しな
い。タイトルが、自分の名付けるコーパスに取り込まれるがままになって
いたら、単純素朴にその一部になっていたら、そしてまるで作品内の要素
のひとつであるかのように、パーツのひとつであるかのようにしてい
たら、タイトルは自分の役目を演じることを止めることになり、タイトルの
価値を放棄することになる」。端的に言って、「デリダ＝エクリチュール」
は、「サラ・コフマン」という名をそれとして即位させ、合法化すると
同じ身振りで、「サラ・コフマン」という名において自らをさらすタイト
ルの価値を取り消すのである。他方、テキストは控えめに、だがはっきり
と読める形で、次のことを示している。タイトルを付けないという演技を
している名＝タイトル（ $\text{名} = \text{タイトル}$ ）の間で披露されている手品のこと
を、「デリダ＝エクリチュール」みずから良く知っているのだ、というこ
とを。デリダの文章をもう一度取り上げよう。「暴力的に選び出すこと、
不当になされる解釈のフレーミング、もしくは、自己陶酔的な再所有化。
自立する署名があるにはある、だがそこで語られるべきは、そして私が語ろ
うと思うのは、サラ・コフマンについて、唯一サラ・コフマンについてだ

け……」私は「自己陶酔的な再所有化。目立つ署名……」に強調の傍点を付ける。

デリダに「タイトルの付与はいささか慎みに欠ける、という疑念がよぎ」ったのだとすれば、彼のエクリチュールが行っている演技は、彼の「自己陶酔的な再所有化」の提示と時を同じくして、次のことを明るみに出そうとしていることになる。すなわち、「ジャック・デリダ」という名は、「著者」の地位から滑り落ちることになり、同じく、「サラ・コフマン」も、そうであり得たタイトルの地位から滑り落ちる、ということ。いずれにしても、我々が施す権利を持つ複数の解釈は開かれている。

贈与の返礼としての贈与〔*don pour don*〕、赦しである贈与／贈与による贈与〔*don par-don*〕、この地平へデリダの追悼は向けられる、だが彼は一挙に告知する。ジャック・デリダは、代替不可能なタイトルの代わりに、サラ・コフマンのために、また、サラ・コフマンによって、署名する。その署名は最終的には見いだすことが出来ないままであり続けるタイトルによって成される。同時に、「著者」の名も、タイトルの偽代替物の地位へ押し上げられることによって、同じ身振りのうちに、「著者」として認知される権利を喪うことに同意する、というのもそのようにして彼は自己の罷免を遂行するのだから。ジャンル／ジェンダー〔*genres*〕のトポロジックな転位と、真の代替なき代替のシーンによって、少なくとも部分的に隠されるのは、テキストの解きほぐせないアポリアの結び目のうちの、もうひとつ別の結び目で、それは実際、J.D.にとっても「匹敵」できるかどうか確かではない、ということの意味している。だがここでのアポリアは果てしないまだ。J.D.は何に匹敵できないだろうか？ S.K.というタイトルになのか？ それとも死の向こう側の、あるいは死を越えたS.K.自身になのか？ それともS.K.の死に、なのか？

タイトルの余白にある贈与／赦し〔*par-dons*〕

タイトルと名、「著者」の名とタイトルの名、との間の衝突において追

加の一撃が行われるに値する。というのも、「タイトルの付与」、もしくは贈与それ自体は、いかなる点において、「暴力的に選び出す」とことと共通点を持つのか、「自己陶酔的な再所有化」の身振りとして理解されるのか、しかもその贈与は、ここでは、タイトルの構造のなかにではなく、与えることそれ自体の運動のうちにあるのだ。この問いは注目に値する。なぜなら、テキストはその後、サラの、サラへの、あるいはサラによる、与えられあるいは受け取られた、単数のあるいは複数の贈与の問題を問うのだから。他のテキスト同様このテキストでも贈与の概念がデリダにとっての問題となっているだけではない、贈与による〔*par-don*〕赦し〔*pardon*〕の概念もそうなのだ。それはテキストを通じて様々な形で変化してゆく争点である。これについては後で戻ろう。ここでもまた新たな迂回、新たに周縁を遠回りすることによって、テキストへ回帰できるのであり、デリダ的恐れと慎み深さを解釈して再備給することも正当化されるのだ。デリダ的贈与の跳躍を、その身振りのただなかで中断させるのは、「与える」〔*donner*〕という語の両義性に、少なくともインド＝ヨーロッパ語源における両義性に原因があるのだろう。両刃の剣となっているこの新たな運命の一撃の全容を測るには、いささか長くはなるがエミール・バンヴェニストを引用する必要がある——デリダは彼の資料体を完全に熟知していた——、バンヴェニストは、「与える」という語の両義的で実際不適切な語源についての発見からあらゆる結果を引き出すようにと要請している。この語は、今日では、実際、双手使用〔*ambidextre*: 二重使用〕の性格をまんまと忘却せしめている。

大部分のインド＝ヨーロッパ語において、「与える」は、語幹に**dō-*を持つ動詞によって表現される。**dō-*はまた、多数の名詞派生語を作り出してもいる。この意味作用の恒常性に疑いを差し挟む余地はないように思われていたが、その後、ヒッタイト語動詞の*da-*が「与える」ではなく、取る、を意味する、と確証されて事情が変わった。大きな

困惑が生じた。それは今でも続いている。[…] 実際のところは、「与える」から「取る」を、あるいは「取る」から「与える」を引き出すとしても、問題は解決できないように見える。問いの立て方が悪いのだ。我々はこう考えることにしよう。**dō-*はそれ自体では「取る」も「与える」も意味してはいなかった。シンタックスに応じてどちらの意味にもなったのだ、と。対立する二つの意味を許容する英語の *take* と同じように使われていたのに違いない。*to take something from s. o.*、「～から何かを取る」とも、*to take something to s. o.*、「～へ何かを取ってやる」とも使えるように。加えて、*to betake oneself*「行く」も参照されたい。それにまた、中世の英語では *taken* は “*to take*” 「取る」と同じく “*to deliver*” 「引き渡す」も意味する。同様に **dō-* は単に掴むという事実を示していただけだった。発話内容のシンタックスが、「自分のものとするために掴む」(＝取る)のか「贈与するために掴む」(＝与える)のかを区別していたのだ。各言語は、一方の語義を犠牲にしてもう一方の語義を優先させ、そうやって “*prendre*” 「取る」と “*donner*” 「与える」という対立し区別される表現を構築した。¹³⁾

つまり、「与える」は「取る」なしでは理解できないし、「与える」は意味の双手使用 [ambidextre] の語であると分かる。私がこの用語を使うのは、一方の手で与えるものをもう一方の手で再び取ってしまうからだ。ところで、デリダが追悼のテキストにおいて実践しようとしている区分の戯れのなかで、彼の関心を惹いているのは、明らかに、こうした、語の二重の戯れであり、そしてまた、その語の非固有性／不適切さ [non propre]、語の所有化の不可能性と不適切さなのである。すでに言われたとおり、テキストのタイトル不在を通して投げかけられているのは、「固

13) Émile Benveniste, « Don et échange dans le vocabulaire indo-européen » (1951), repris in *Problèmes de linguistique générale* I, Gallimard, « Bibliothèque des Sciences Humaines », 1966, p. 316. 括弧と強調はバンヴェニスト。

有名詞」〔nom propre〕、従って「不適切さ」〔non propre〕の問題なのだ。贈与の両義的概念（その後テキストのなかでは、そのカウンター指標である「カウンター贈与」が直ちに置かれる）は、そこで実体化されているテキストの一般的な射程をさらに支えることになるのである。

とはいえ、これまで、私はその正確な語義を知っているかのように、「タイトル」を巡って論じた格好になっている。だが、語の総称的価値について論じても、「タイトル」という語そのものの定義を知っていることにはならないし、タイトルを付けられているテキストにとって、その定義が隠蔽するかも知れない内在的な射程を知っていることにもならない。

ところで、タイトルという語の定義を今一度取り上げてみることは重要である。というのも、この、タイトルのないテキストは、喪の周りを巡っているものであり、また、赦しとしては贈られ得ない贈り物を与えることの赦しを求めつつなされる服喪の意味の周りを巡ってもいるからだ。「タイトル」という語の定義は、我々が踏破してきた全問題系を新たに発動させる。実際、『フランス語歴史辞典』によれば、以下のような語義がある。

〈タイトル〉男性名詞。古形 *title* (1165年頃) から音韻的に変化 (1225年頃) したもの。古形は18世紀にもまだ使用され、英語に保存されている。ラテン語 *titulus* からの借用である。ラテン語では元来、告知板、すなわち、戦勝の際に棒の先に付けて掲げた札を指し、そこには、大きな字で、捕虜の数や陥落した都市の名が記されていた。*Titulus* は、貸家を示す立札にも使われ、埋葬の際、個人の生涯を語る立札にも使われた。その後、この語は、支持体よりもテキストを強調するようになり、墓碑銘、記銘、作品の題、人に与えられる名誉の称号またそこから名声、栄誉を指し、また帝政ローマ時代には、口実を指した。*Titulus* は恐らくエトルリア起源で、(*populus* → *peuple* のように) 重複語であるように見える。

◆ この語は、墓に彫られた記銘に関して用いられた後、換喩によっ

て、共同記念碑という意味を持ち（1310年頃）、それは16世紀まで続いた。続いて、旗の記銘（13世紀、*titule*）、キリストの十字架上の札（1372年）、次いで貨幣の刻印（1553年）を指す。これらの語義は [...] ¹⁴⁾

要するに、*titulus*はその起源においては、決まった目的を持っていた。すなわち、敵から「奪取」したものを指し示すこと。戦闘で敵が失ったものの総体を、簡潔だが雄弁に報告すること。この時からタイトルは、敗北した敵という意味で常に理解される他者を相手に獲得した荣誉の称号として掲げられる。それ故に、タイトルは勝利者の代わりを務めていることになるであろうし、その勝利者とは、かすめ取られたものを元々は「所有していた」者をさしおいてそこにいる者に他ならない。タイトルは、これみよがしにその戦利品を数え上げているのだ。我々は脱構築的に、所有化と脱所有化の交わるところにいる。語の起源は、見ての通り、S.K.についてのテキストにおけるタイトルの不在を通じてデリダが制定する関係のなかで決然と意味を持つことは明らかだ。

デリダは言語のなかで正当な価値を持つ固有語にきわめて敏感だったし、言葉が隠蔽している、さらにはエクリチュールのなかで音声言語〔パロール〕が隠蔽している難点を浮き彫りにできるポリフォニーに関してきわめて敏感であった。従って、一方では、「タイトルを与える」という表現をとりあげてみれば、あるいは再びデリダを引用して「タイトルの贈与とは何か」と問うてみれば、それが今や、亡くなった友へ片方の手が与えようとするものを二度にわたって奪い返すことを意味するのは明らかだ。

他方、タイトルを与えないということは、贈与の可能性について慎みを倍加させつつ、デリダは、後退の身振りで、S.K.の仕事、言葉、作品に関

14) *Dictionnaire historique de la langue française* (Alain Rey dir.), Le Robert, 1992, rééd. Poche III vols., vol. III, p. 3835.

して「戦利品収奪」の可能性を止める、ということを合意する。さらに、「タイトル」の語義が「墓碑銘」、「墓」、そしてまた「共同の記念碑」にさえ向けられているのであるから、J.D.にとって重要なのは、死んだ友人へ向けて記念碑を建てないことなのだ。彼を最高レベルで捉えている喪について何かを言おうとしつつも、彼にとって重要となるのは、S.K.が生き生きとした現前において今なお読まれることなのである。彼女の言葉の生気が、少なくともしばらくは、S.K.の周りに読者たちを集め、読むことを促す動因として留まること。「懇願された死」〔la mort conjurée〕に関するサラ・コフマンの最後のテキストを引用するJ.D.は、近しかった者の死の懇願〔conjunction〕を手玉に取っているもののことを彼自身よく理解している。

「耐えられるものにされた耐え難いもの」に関して言えば、この〔S.K.の〕経済的な表現でもあれば、構造そのものの表現でもある言い回しを、私は、我々がここで行っていることを先取りして描き出しているもの、診断的＝予後的なものとして読みたいと思う。すなわち、我々をサラから逸らすために、彼女の膨大な量の偉大な書物、書籍群へと眼差しを向けながら、耐え難いものを耐えられるものにすること。¹⁵⁾

こうして、彼なりのやり方で、他者の言語を詐取する誘惑を封印しようと試み、そして、彼が思いを馳せている名、それは論理家のロジックではタイトルとなるべき名なのだが、その代わりにタイトルとして自分の名を与えることで、デリダは、このテキストにおいて、同時にあらゆるレベルで、このことは別の名の代わりに／に抗って〔pour/contre：の代わりに＝味方して／抗って〕ひとつの名において、演じられるのだと主張す

15) J. Derrida, « », *op. cit.*, p. 142. 括弧はデリダによる。

る。別のジャンル／ジェンダー、に代って／に抗って、ひとつのジャンル／ジェンダー。別の声に代って／に抗って、ひとつの声。別のタイトルに代って／に抗って、ひとつのタイトル。別の言語に代って／に抗って、ひとつの言語。別の言語に代って／に抗って、ひとつの言語。要するに、S.K.に関して、S.K.について、S.K.を巡って執筆する時、「デリダ＝エクリチュール」はあらゆるジャンル／ジェンダーにおける転位に信頼を寄せたのだ。だがそれはとりわけ、彼（J.D.）のなかにいて、彼を横切っているS.K.について執筆する時である。彼との対立（差異／遅延〔différences/différences〕）におけるS.K.について。J.D.と真っ向から抗うS.K.について。

実際、タイトルの定義をもう一度振り返ってみるなら、「*Titulus*は、[…] 埋葬の際、個人の生涯を語る立札にも使われた」。ところで、J.D.が「サラ・コフマンのことを、ただサラ・コフマンのことだけを」語るつもりであるとしても、彼は同時に、「確かに異なったやり方で、一方から他方へと、もちろん、それが良いやり方であれ悪いやり方であれ、[彼らの]やり方で語ることは私には出来ないであろう」¹⁶⁾とも述べている。J.D.とS.K.、生前のS.K.との間に意見の対立があったとしても、J.D.がそれについて何かを言うことは不可能だ、というのも、一方では、それは二人にしか関係していないからであり（それに、動詞の「相互反射」、「再帰的なもの」はテキストを通じて警戒態勢に置かれるべきものとなっている）、またとりわけ、S.K.は応答することができない以上、S.K.の人生のこの部分は、おそらく複数のテキスト群を通してでない限りは、もはや接近不可能であるからだ。

換言すれば、テキストにおけるJ.D.の関心は亡くなった彼女の人生にはないであろう（と我々も思っていたが）、とはいえ、不在のタイトルを持つテキストとの関係によって、亡き彼女の人生にたいするJ.D.の関心は演出されるのである。密かに、あるいは、エバーハルト・グリューバーの言

16) *Ibid*, p. 133.

い方を変形させて使えば、「半ば＝密かに」。「半ば＝密かに」の意味はこうだ。テキストは、問題にしようとする争点を明白な形では表さないのではあっても、我々は行間を読み、その全帰結を引き出さなくてはならない。これがその意味である。行間を読むということは、J.D.の他のテキストからも読み解く、ということを要請する。『境域』との関係はすでに指摘したが、時間的な観点からするとS.K.についてのテキストとより近い別の二つのテキストと付き合わせて、S.K.についてのテキストを読まなくてはならない。二つのテキストとは、「割礼告白」と「蟻」であり、両者とも90年代初頭に書かれている。特に「割礼告白」は、喪およびD.S.の問題を通じて、S.K.についてのテキストと共に、テキストを編みあげて行けるので重要である。

とはいえ、「割礼告白」と« »〔無題のテキスト〕との間での) 喪の問題に取りかかる前に、強調しておくべきことがある。サラの贈与の問題、この贈与の「証言」の問題、さらにはサラとの間にあり得た意見の対立の問題を巡った後で、デリダは「固有性」の問題へと話を進める。あるいは、より正確に言えば、「固有性」において〔en « propre » : 独占的に〕「場所」を持つことが意味するもの、について。

生起しているのは何か、と人は自問する。場所とは何か、正しい場所とは何か、場所を定めること、移動させること、入れ替えることとは何かを問う。人はそれを問う、いつも書物がやってきて身体の代わりをするとき。書物が固有の身体と、性を持つ身体と入れ替わり、名になろうとさえし、場所を占拠し、もとの占有者の代わりになろうとしたときに […] ¹⁷⁾

本来タイトルのあるべき場所に自分の名を与えることで、自分はサラの

17) *Ibid.*, p. 132.

味方を、かつて今もこれからもするのだ、ということを、デリダは彼のやり方で公言しているのである。自分の取る立場は決心の結果であり、自分と彼女との間にいかなる対立と相違があろうとも、自分はS.K.の側に立ち、S.K.についてS.K.のために、S.K.に代わって語る、ということ。これをした後に、贈与と赦しのことで両者が互いに相手に負っているもの全てを（いまだ暗号めいた表出の仕方ではあるが）強調するのである。というのも、このテキストでJ.D.は絶えず赦しを請い続け、S.K.による赦しの贈与を要求して止まないのだから。しかしながら、赦しの問題に戻る前に、S.K.の（現前＝不在の）身体をめぐる、「デリダ＝エクリチュール」においてあるいはそれを通じて、ジェンダーは混交する。そこから、彼女に代わってサインするというJ.D.の決心が生まれる、と我々は推測できるのである。

人は全てを語ることはできない、それは不可能だ。サラについて、彼女は何であったのか、何を考え、書いたのか、について、これからもその豊かさとしと必要性が語り継がれるであろう作品について、全てを語ることはできない。できるのはそのことを受け入れ、態度を決めることだけだ。

それゆえ、私は受け入れ、態度を決める——サラの味方をする。

これが別のタイトルだ。

『サラの味方』 [*Le parti de Sarah*]¹⁸⁾

このパラグラフのなかに、新たな結合〔婚姻関係〕が為されている。コーパスの断片（身体の環〔割礼〕／テキストの環）がJ.D.をS.K.の擁護へと結びつけている。

先に我々はJ.D.がS.K.を囲み限定しようと試みていた、と指摘してお

18) *Ibid.*, p. 135.

いた。その目的が何であったか今は理解できる。継続するこれらの環は、肉体の環を、つまり、テキストの断片からなるコーパスを形成するのだが、それは彼をS.K.に近づけつつ遠ざけていた相違する対立を通じてテキストが彼にもう一度演じさせてくれる言語の戯れ、および彼の舌／言語を起点として形成するのである。とはいえ、この言い方で何を理解すべきだろうか？ 味方する〔prendre parti〕、それは他者の側に身を置くということである。S.K.の側に、つまりここでは、女性〔féminin〕の側に。決心する〔prendre le parti〕、ということ、それは、ジェンダー〔男女のジェンダー／男性名詞、女性名詞〕の横滑りとして、S.K.について、を巡って、に関して、に代わって、言うことが可能な部分を手中に収めること〔prendre la partie〕でもある。だが「サラの味方」はさらに二つのことを語っている。それは、少なくともエクリチュールの枠内で、S.K.を結婚相手〔parti〕にする、婚姻関係を作る、ということだ。コーパスとコーパスの婚姻関係を締結し、両性のというよりはテキストの結婚契約を交わすということ。その契約はテキストからテキストへと演出される署名と副署の戯れを通じて成されるのである。だがさらに、（ふたたび男性形の）prendre le parti〔決心する／味方する〕は、サラの男性の部分〔part : 持ち分〕としてのle partiと同盟するということになろう。最後に、何よりも、彼女から立ち去ってしまったものの側からの省察を始めるということに帰着する。もはや彼女ではないもの。彼女に関してもはやここにはなく、残余をなしているもの、(J.D.、男性読者、女性読者という) 相手方の契約者と共に、男性性の文法を共有するもの。

おそらくこのために、J.D.はこう主張するのである。「味方すると決めたうえでの偏見として、私は最終的にサラ〔Sarah〕の芸術〔art〕について語ることを選んだ」¹⁹⁾。テキストに含まれる単数のあるいは複数の「味方」〔parti(s) pris〕の調子の変化を通じて散種される意味たちをこの文章

19) Ibid.

の構文は狂おしく狼狽させているのだが、その文章は次のように理解しなくてはならない。すなわち、J.D.は、相手方〔le parti〕から、あるいは相手方〔le parti〕について、奪い取った(奪い返した)〔(re)pris〕ものの味方をする〔parti pris〕決心をしている〔prendre le parti〕のだ、と。そして彼はS.K.に味方するという決心を取り上げる〔(re)prend〕。それが延々と続くのである。サラの味方をする〔prendre le parti de Sarah〕ということ、それはまた、同じページでJ.D.が強調しているように、「受け入れる」〔en prendre son parti〕こと、サラについて、彼女は何であったのか、何を考え、書いたのか、について「…」全てを語ることはできない」という不可能性の側に立つ、という(彼女の、そして／あるいは、彼自身の)決心を受け入れることなのである。「私は最終的にサラの芸術について語ることを選んだ」、とは、「デリダ=エクリチュール」の詩的=哲学的言い方では、みずからの芸術を奪われているサラのパートを演奏し直す、ということの意味する。別の言い方をすれば、彼女の「固有名」／「不適切さ」・「固有の否」〔nom propre/non propre〕の再演である。というのも、ここにあるのは固有名のただ中で作動している深い切り傷なのであり、それによってS.K.について、S.K.を巡って、何かを言うことが可能になるからだ。そこでまた、この表現の文字通りの意味としては、次のことが強調されている。すなわち、J.D.は、名の綴りを通じて、サラの一部を、彼女の名のことを、そしてまた彼女のことを語っているのだ、と。

最後に、また同時に、こう考えることが可能である。J.D.はこの« parti pris »のレトリックを通じて、S.K.と共に忘却のシーンを(みずからに)演じているのだ、と——あるいはむしろ、「懇願された死」のシーンを。ちょうど彼が、レンブラントに関するS.K.のテキストを基に、そう言っているように(p. 151)——エクリチュールの同じ運動のうちに、「サラの擁護」を後ろ盾として。というのも、サラが部分的にしかこの世を旅立っていないのだとしたら、それは、すべてが行ってしまったわけではないからなのだ。彼女はすっかり旅立ったわけではない。旅立っていないパート

が残り、J.D.の中に跡を刻む。そこから恐らく、「ジャック・デリダ」というサブタイトルが来る。それは旅立っていないS.K.のパートに関係しているのであろう、彼の中の彼女のパート、彼を思考／反射〔réflexion〕へ強いるパート。二重の意味。一方では何かを理解するために思考する〔réfléchir〕ようにと促すのであり、他方、エクリチュールの中で、あるいはそれを通じて、自分を見つめるように促すのである。見つめる目的は、彼女のことで彼の中に残存していて、彼女と彼の間に結び目を作っている言葉の結合を持続させているものとは何かをもっと良く理解することなのであるが、この結合は二声の言述で、二つの声^{ディスクール}が互いを編み込みながら、友人の死によって切断され中断された結合の言葉を通じて、隠喩的に再創造し、この死において、そのたびごとに唯一の、他者の喪失を、自己のうちなる他者の喪失を演奏し直しているのである。こうして、偏見のうちに味方する糸をたどってゆくとき、S.K.のなかの旅立ったもの〔le parti〕が（男性形の）相手方〔le parti〕であるとするなら、残っているもの、J.D.のなかに残存しているもの、とは、旅立っていないパート〔la partie non partie〕、J.D.によって読まれたS.K.のコーパス〔身体／テキスト〕を、J.D.の中へ散種しながら痕跡となっている（女性形の）パートなのであろう。

贈与＝赦し〔par-don〕のジェンダー

別の言い方をすれば、そして、私がたどり始めたメタファーを展開してゆくなら、J.D.は、S.K.のコーパスを再読し——そして自らをそこへ結び直す——ことを（少なくともD.S.に関しては）可能にする全てのpartis^{*4)}で自分はあるのだと主張しているのである。実際、この追悼のなかで、D.S.はあらゆる方向に散種している。139ページで、デリダはS.K.の身体

*4) ここではデリダがpartiという単語に与えている全ての意味において、政治的党派、決心、味方、旅立ったもの、ゲーム、等、を意味する。

〔corps〕を *la corpse* へと変形している^{*5)}。「ひとつのコーパス〔corpse〕、こちらに主体があり、そちらに客体がある」。それを通してすべてのジェンダー／ジャンルが新たに通過してゆく。*le corps*〔身体〕、*le corpus*〔コーパス〕、*la corpse*〔死体〕。レンブラントの〈ニコラ・テュルプ博士の解剖学講義〉(1632年)を読んでいるS.K.の男性＝女性身体／コーパス、としてのコーパスが、J.D.によって読まれている。男性＝女性という二つの焦点を持つ読みにおいて、同時に演じられているのは、性・男性名詞／女性名詞・ジェンダーの x 個の声を持つ読みであって、その声は(みずからも)切断し、中断し、代わる代わる言葉を(みずからにも)与え再び取り上げ、赦すのだ、果てしなくエクリチュール自身を「投げること」〔jet〕のなか、「企図」〔pro-jet〕の、「投影」〔pro-jection〕のなかで。というのも、テキストがあるためには、D.S.がなくてはならないからである。というのも、「蟻」のなかでデリダが書いているように、「(“D.S.”——は領域でも事物でも両者間の正確なスペースでもない。それは運動そのもの、反射、再帰的なもの〔le Se〕、否定性なき否定の女神^{*6)}、私の心に触れる捉えがたいもの、最も近いところから来て、閃きながら私自身に、あり得ない私＝他者を与えつつ、君＝になっている＝私〔le tu-que-je suis〕、を、他者との接触において出現させる。)」²⁰⁾

さらに、「読むべき痕跡」²¹⁾の寄せ木細工がなくてはならない。つまり、

*5) 邦訳(『そのたびごとにただ一つ、世界の終焉』II, p. 87. サラ・コフマンの未完の遺稿「払いのけられた死」について、デリダはこう書いている。「そこには書物が死者と身体＝死体〔corps-cadavre〕の位置を同時に占拠するとき、書物が及ぼす歴史的な幻惑の物語を読み取ることができます。私はむしろ英単語を用いて *corpse* と言いたいと思います。なぜなら、この英単語は身体、コーパス、死体の意味を同時に含むばかりでなく、この語をフランス語式に *la corpse* と綴って読むと *le corps* という語が女性化され、性差を尊重すると言わないまでも、暗示するものとなるように思われるからです」(土田知則訳)

*6) D.S. (デ・エス) は、女神 (déesse・デエス) と同じ発音である。

20) J. Derrida, « Fourmis », in *Lectures de la différence sexuelle*, op. cit., p. 56.

21) *Ibid.*, p. 74. デリダは次のように書いている:「[...] 性差があればたちまち、言

ひとつのジェンダー／ジャンルから他のそれへの移行が、すなわち、ひとつのテキストから他のテキストへの移行が。私と君との間の、「君＝になっている＝私」[le « tu-que-je suis »]と「私＝になっている＝君」[le « je-que-tu es »]との間の移行。換言すれば、D.S.と、そしてテキストの複数の読みとが存在するやいなや、他者性の関係が、「君」との関係が問題となる。私の、君の、「私＝私たち」のなかの他者、私たちのなかの「私たち＝ともう一人」。我々はこの比喩の変形をS.K.についてのテキストのなかに見いだすと同時に、ブランショ、レヴィナス、ハイデガー等々についてのテキストのなかにも見出す。見出してみると、それはあたかも、D.S.が、他者（ジェンダー、性、現存在 [Dasein]）の問題についての問題をデリダのもとで果てしなく演じあるいは投げかけ直しているかのようだ。例えばS.K.についてのテキストのなかでは、我々にはもはや判然としなくなるのだ、誰が赦しを求めなくてはならないのか、誰が他者へ赦しの贈与を施さなくてはならないのか。J.D.がS.K.に赦しを求めているのだろうか、もしそうなら、何のことで？ それともそれは、J.D.によってJ.D.のために、J.D.のなかで、J.D.とS.K.の間で演じられている贈与と赦しのシーンなのだろうか？

演じられているシーンが何であれ、テキストのなかに不確定性が増殖し、その結果、哲学者デリダによって計画され、とりわけ一般化された決定不能性の割れ目の上に留まっている読者のもとで不確定性は増殖する。はっきりしているのは、ここには一種の複数ジェンダーの「嚙下」が

葉が、あるいは読まれるべき痕跡がある。性差はそこから始まるのだ。性差の無い痕跡もあるかもしれない、たとえば無性生物のように。けれども痕跡のない性差はあり得ない […]。だが、そのときから、性差は、見るべきものではなく、解釈すべきもの、読み解くべきもの、暗号解読すべきもの、読むべきものとなる。読み得るもの、したがって、不可視のもの、証言する対象であって、証明する対象ではないもの——そして同時に怪しげで、流動的で、不確実なもの。性差は通過してゆくものであり、男性性から女性性へ、一方を通り他方を通り、女性性から男性性へ、通過してゆく […]」 pp. 74-75、強調はデリダ。

あり、それを通してデリダは不可能な赦し（というのも、このシーンでもまた、一切の赦しは不可能なことが分かっているから）の一幕を我々にたいして演じる快楽を自分自身に与えている、ということだ。というのも、S.K.における赦しの諸シーンを分析するにあたって、J.D.は、「その途中で」、忘れることはないからだ、彼のもとでも、同じように、赦しの諸シーンは、可能なものとして完成することは出来ないからこそ増殖してきたのだということを。赦しがあればあるほど、そこに到達することはますます不可能になり、また、自分のなかで自分を通して可能な同盟に調印することも、ますます不可能になってゆく。こうして、

途上、「仮面をはぎとる」[démâsquar] という語を頻繁に用いつつ次々に仮面を脱ぎ、ニーチェとフロイトの間にある仮面とヴェールの問題、とりわけ性差、羞恥、それを被うこと＝暴露すること、をめぐる仮面とヴェールの問題を扱ってゆくこの本は、絶えず贈与を覚醒させる、再贈与の行為における贈与の再確認を覚醒させるのだ。贈与の再構築でもあればむしろそれ以上に贈与の再確認であるもの。²²⁾

D.S.は、贈与と不可能な赦しのシーンのただ中に書き込まれる。それはデリダが、悔恨あるいは告白として吐露する時に書き込まれるのである。贈与の最終的なアポリア、それは、[贈与が] 一度も起こることが出来ないということだ。沈黙のうちに声に出してか、赦しを与えるにせよ与えないにせよ。このアポリアをデリダはサラの徴のもとに我々に吐露する。「というのも、赦しの最後のアポリアがここにあるからだ。たぶん最も芸術家的なアポリアであり、爆笑させるのに最も才気あふれるアポリア。私もあなたへ、同様にサラへ、それを吐露する、私の中のサラ、あなた方と

22) J. Derrida, « », *op. cit.*, p. 154.

私の間のサラへ。今日これで終わりにするために」²³⁾。

従ってS.K.は、J.D.と聴衆との間で（従って、J.D.と我々読者との間で）複数の身体／コーパス〔corps〕が死体〔corpse〕となったものなのだ。「今日これで終わりにする」ために、テキストを中断する身振りの署名としてみずからを与え、構文自体の中で、生の自発的な中断へ合図を送り、もしくはそれを参照しつつ、「私はそれを〔贈与の最終的なアポリアを〕あなた方に吐露する、今日これで終わりにするために」。双数の読みが構文からじかに生じて、ふたたびぶつかり合っている。一方には、テキストについて終わりにする、講演を終わりにする、という意味。他方には、人生を今日終わりにする、今日、人生の流れを断つ、という意味。

ところで、死〔thanatos〕を経由する新たな迂回、そこへ我々を文字通り「デリダ＝エクリチュール」の渦巻が直面させる、その迂回の秘密のなかで、「割礼告白」はより透明に関係性のヴェールを脱ぐ。S.K.についてのテキストを通じて、J.D.は、女性哲学者の死のことを語っているにもかかわらず、一度も死の状況について言及していない。ただし、135ページに書かれた暗黙の迂回は別だ。そこにはこう書かれている。「サラが死んで以来、そして仮にそれについて自分は何かを言うことができるのだと想定してみた場合、それについて語ることは真理がそこにあるお陰〔devoir〕なのであって、そのようにして私は彼女にたいして借りがある〔devoir〕のだが、サラが死んで以来、しかも何という死だろう、そうしたいと望むことができたようには私には話すことができなかった […]」²⁴⁾。

このパラグラフにおいて聞こえているのは、義務〔devoir〕のレトリックと、そして同時に、贈与のレトリックである。「しかも何という死だろう」は、心の叫びとして働いている。私がすでに引用した一節を、無時間

23) *Ibid.*, p. 161. 強調は引用者。

24) *Ibid.*, p. 135. 強調は引用者。

的＝時間錯誤的〔a(na)chronique〕再読を通じて、ふたたび投げかけながら。もう一度引用しよう。

途上、「仮面をはぎとる」〔démasquer〕という語を頻繁に用いつつ次々に仮面を脱ぎ、ニーチェとフロイトの間にある仮面とヴェールの問題、とりわけ性差、羞恥、それを被うこと＝暴露すること、をめぐる仮面とヴェールの問題を扱ってゆくこの本は、絶えず贈与を覚醒させる、再贈与の行為における贈与の再確認を覚醒させるのだ。贈与の再構築でもあればむしろそれ以上に贈与の再確認であるもの。

ところで、「途上」、この通過は、「割礼告白」——このテキストは、J.D.の母の死で宙吊りになっている時期に書かれたのだが——の二つの節^{ピリオド}と響き合っている。というのも、S.K.はテキストを書きながら他者（男性）の「仮面をはぎ取り」、一方、再贈与の行為を通じて贈与を「書物は覚醒させる」のであるが、J.D.のほうはといえば、「割礼告白」のなかで、こう白状＝告白していたのだったから。自分が他者（男性＝女性）を引用するとき、実は自分は他者を通じて自己引用していただけたのだ、と。節^{ピリオド}のひとつから取り出して、彼の言葉を引用しよう。「[…] 私はG.以上に引用している、とはとりわけ思っ^て欲しくない。私はいつものように、皮膚をはぎ取る、私は他者の書いたものを天使のように賢明に読みながら自分の仮面をはぎ、皮膚を鱗状にはがすのだ、私は自分自身を血が出るまで引っかく、しかし他者の中でだ、あなたを怖がらせないように、あなたが負債を負うのは彼らのもとでであって、私のもとではないようにするために[…]」²⁵⁾。換言すれば、読者は読書の入れ子構造によって引き起こされる目眩に捕らわれてしまい、そこから、S.K.を読むJ.D.を

25) J. Derrida, « Circonfession » (45), in Jacques Derrida par Geoffrey Bennington et Jacques Derrida, Paris, Seuil, « Les Contemporains », 1991, pp. 222-223.

読む読者は、同時に彼女のなかで、彼女を通じて彼自身を読むデリダを読んでいる、と想定することができるのである。こうして我々は、D.S.の運動の螺旋運動のなかに再び書き込まれる。別のコーパスによって、別のコーパスのために読まれ、踏破されたコーパスの「反射」のなかに。そしてまさにそこにおいて、「デリダ＝エクリチュール」はS.K.の死の状況について保たれた沈黙を通じて取り＝戻され、あるいは自らを取り＝戻す贈与の一撃を、その言語遂行性において、再演する。けれども彼女の死の状況は、テキスト全体を通じて、暗号化されて姿を現している。

S.K.は、フランス語でそう言うように、自分に死を与えた。おそらくそのことにおいて、「与える」という身振りは、それが語源に持つ「与える＝取り上げる」という両義的意味を、最も鮮烈にまた苦悩に満ちて炸裂させる。J.D.は「割礼告白」のなかですでに、そのような問題が強いてくる目眩について語っている、例えば、53節ではこう書いている。

[…] 人が書くのは現在のためだが、その現在は、拒絶された死後の生がおのれへ回帰してくることによってしか作られていない（つまりsAが真実を製作したがっているという意味での）現在である。拒絶されている、*denied*、エクリチュール自身によって確証されている拒絶と否定、個々の単語にそなわっている語の最後の意志、そこでは私のエクリチュールは自己の剥奪を享受し、証人の前で贈り物として自分自身に死を与えることに嬉々としている。避けられない死、それは第一に相続によって意味されている、なぜなら、ここで私は自分に死を与える、という言い方は、ひとつの言語〔フランス語〕のなかでしか言えないからで、その言語は、私が今いる現在よりも一世紀前の1830年にアルジェリアの植民地化によって私に贈られたとも言えるものなのだ。*I don't take my life*〔私は自分の命を取らない〕。私は自分

自身に死を与える。²⁶⁾

とはいえ、この一節を、その不安定さとその広がりにおいて完全に理解するには——S.K.に関してということだが——「割礼告白」の他の一節と付き合わせなくてはならない。そこで私は引用し、その後、ここで要請されているひとつの読みを提示することにしよう。

[...]すでに彼女は言葉といえるものはほとんど何一つ言っていなかったし、見たところ状況に適合していることも言っていなかった、従って、人間的なやりとりの通常の規則に適うと見えるものも何一つ言っていなかったのだが、そのとき彼女は、はっきりしない呻き声のただ中で明瞭に発語した、「私は自分自身を殺したい」と。
[...]おそらく私の書くものが、たとえ読解不能の形ではあっても、定式化すべき読書の規則に従って言表できるのは、そのことだ。つまり「私は自分自身を殺したい」というのは、私の文章、吐き出された私の文章だということであり、ただそれは私にだけ知られていて、自殺の演出、虚構の決心ではあるのだが、しかしきわめて動機づけられ、得心していて、真面目な決心、自分の人生を終わりにしたい、という、絶えず投げ直され、反復される決心なのであり、その反復は私の内面の劇場をいつも占拠しており、たゆむことなく私はその上演に身を入れているのだ、一群の幽霊たちの前で。それはひとつの儀式、真情の吐露であり、他人の目には触れないことが保証されているために限界がない [...] ²⁷⁾

26) *Ibid.* (53), pp. 262-263. sAは「割礼告白」のなかでデリダが聖アウグスティヌスのために用いた略号。聖アウグスティヌスの思想はデリダの考察の中心を養っている。

27) *Ibid.* (7), pp. 38-40. 括弧はデリダによる。

もちろん、「私は自分自身を殺したい」という構文は、「私は自分自身に死を与える」という構文と等価ではない。しかしながら、死の贈与の身振り、あるいは少なくともその企図の身振りは、やはりそこに書き込まれている。従って、これらの文章が「割礼告白」のただ中に書き込まれた時期の身体とじかに触れあいながら巡り、反復されていることは、取るに足りないことではないし、とりわけ、これらの文章が、別のバイアスのもと、実際にみずから死を与えた友人について語っているときに再び出現するというのは、重要なことなのだ。こうして、贈与の問題と、「タイトルの付与」の意味を問う問題とは、新たに始動する迂回を通して出会う、なぜなら、「死を与える」こと、より特殊的には「自分に死を与えること」の問題が、その再帰代名詞の構文のうちに、担った影をテキストを通じて拡散させていたのだから。もっとも、そのようなものとしてはっきりと掲げられていたわけではなかったのではあるけれども。そしてそれは、J.D.が言語のなかで作動させる微妙な調子の変化を通じて再び出会われるのだが、その使用する語彙——タイトル、与える、取る——についていえば、語源から汲み取ってくるのであって、そのようにして、それらを養う意味の二重性を銘句として掲げ、その二重性によって「自分に死を与える」という構文を新たな光のもとに分析することができるようになるのである。

「割礼告白」を書いていた時期、「死を」猶予された母の声を腹話術のように声にししながら、J.D.は確かにひとつの類似した声が、タイトルのないこのテキストの執筆時、S.K.によって遂行された身振りを起点として、自分のなかに生まれるのを聞いたのだった。J.D.にとっての「虚構の決心」、それは友人〔コフマン〕によって遂行され、友人の「コーパス」に依拠したテキストを書くなかで再演された決心であるのだが、この決心はこうして、ここで浮き彫りにされている二つのコーパスを編み合わせるなかで、そのような〔自殺という〕身振りの結果を、D.S.が作動させている迂回を通じて、再演しているのである。

ひとつのテキストから他のテキストへ果てしなく投げ返されるこの問題

をめぐってデリダの言語が追いかけてゆく、とりわけ、S.K.へ捧げられた追悼文において極めて凝縮されたやり方で追いかけてゆく渦巻を一周するのは残念ながら一論文の枠内では不可能だ。デリダの著作に文字通り取り憑いているこれらの問い——喪とD.S.——に関して²⁸⁾全て語ることは、あるいはその全体を語ることはできない。それには一冊の書物が必要となるだろう。従って、わたしはミレイユ・カル＝グリユベルの言葉に結論を語らせるにとどめておこう。彼女は、『ジャック・デリダ、寛容な距離』に収められている「母の形象、言語の割礼」に関する分析のなかで、「デリダ＝エクリチュール」の言語使用における喪の思考が包含する争点の全体を見事に要約している。喪の思考は、デリダがサラ・コフマンについてのテキストで展開する迂回と驚くほどに響き合っている。

割礼の時期はペルセウスの盾である。そこでは死を直に見ることの不可能性をめぐって言葉が協同する。そのようにして意味の完成という石化を回避するのだ。死を斜めから捕獲しつつ死に捕らわれないでいるのだ。つまり、重要なのは、「私の死」が命を持ってしまうような絶対的中断のシーンを真に演じて見せることなのである。すなわち、蘇りとは逆に、墓の彼方の記憶ではなく、私を越えたものの法悦があるのである。巧みな处世術や秘伝の死に方があるのではなく、生き延びる力があるのだ。兩岸を同時に見る目を持つ能力 […]。²⁸⁾

28) Mireille Calle-Gruber, *Jacques Derrida, la distance généreuse*, Éd. La Différence, « Les Essais », 2009, p. 83. 括弧はカル＝グリユベル。